

京都橋大学 地域連携センター

つながる Vol. 9

つながる

CONTENTS

Interface 実践の知 第8回

障害者雇用について

狩俣 正雄 滋慶医療科学大学院大学客員教授/大阪市立大学名誉教授

第7回橋セッション

遠隔地域と大学との連携の在り方について

地域包括協定を締結した和歌山県および那智勝浦町との
連携について考える

中世の熊野那智と京都一熊野詣と補陀落渡海を中心に—

細川 涼一 本学学長/文学部歴史学科教授

和歌山県の過疎対策および大学のふるさと事業の成果について

柏木 忠寛 和歌山県過疎対策課移住推進班主査

那智勝浦町の現状・課題と今後の将来計画

小谷 成郎 那智勝浦町役場総務課企画係副主査

京都橋大学・熊野再発見プロジェクト2016参加学生の報告

朝岡 一将 本学現代ビジネス学部都市環境デザイン学科4年生

大門 佑輔 本学現代ビジネス学部都市環境デザイン学科4年生

中村 岳樹 本学現代ビジネス学部都市環境デザイン学科4年生

田中 成奈 本学現代ビジネス学部都市環境デザイン学科4年生

田中 裕子 本学現代ビジネス学部都市環境デザイン学科4年生

京都モダニズム建築を訪ねて 第19回

智積院会館

河野 良平 本学現代ビジネス学部准教授

Interview ともに 第9回

障がいがあっても、なくても、安心して暮らせるまちに

障がいのある人が、まちなかで働き、暮らす意味

橋本 伸子 一般社団法人ほっこり代表理事・ほっこりステーション施設長



障害者雇用について

狩俣 正雄 Karimata, Masao

滋慶医療科学大学院大学客員教授／大阪市立大学名誉教授



1950年、沖縄県宮古島市に生まれる。現在、滋慶医療科学大学院大学客員教授、大阪市立大学名誉教授、博士（経営学）。障害者の権利保障をすすめる会代表として地域で障害者運動に取り組んでいる。

人は、障害のあるなしに関係なく、就職して経済的に自立した生活をしたいと思っている。しかし、障害のある人は本人がいくら働く意欲を強く持っても雇用されることは困難である。そこで、わが国では障害者雇用促進法があり、一般の民間企業で常用労働者50人以上の規模の企業は、2.0%以上の障害者雇用を行うことになっている。しかし平成27年の調査では、民間企業の実雇用率は1.88%であり、雇用率達成の割合は47.2%で、半数以上の企業がこれを達成していない。そのため、障害のある人の大多数は在宅で過ごすか、あるいは福祉施設や小規模作業所などで低額の工賃でしか就労できない状況に置かれている。なぜ障害者雇用は進展しないのであろうか。なぜ多くの企業はわずか2.0%の雇用率さえ達成せず、法律を遵守しないのであろうか。ここでは、どうすれば障害者雇用が進展するか考えてみたい。

障害者問題は、長い間、障害のある人の障害そのものに原因があるとされ、その障害を克服して社会に適応することを求められてきた。しかし、近年、障害というのは、個々人の違い（差異）に対応できない社会の制度や慣行、あるいは社会参加を制限している物理的、制度的、意識的バリア（障壁）の結果生じる、と考えられてきている。問題は障害のあるなしに関係なく、社会が人間の尊厳を尊重し、一人ひとりの人権を保障するかどうかである。社会が障害のある人々に配慮し、バリアを除去し、共に助け支え合うように変われば、障害のある人も地域社会で当たり前共に学び働き生活できるのである。いわゆる障害者観における医学モデルから社会モデルへの転換である。

このような考え方が世界的に拡がり、障害者差別

の禁止や、教育、就労、生活のすべての分野での共生を求めるインクルージョンの理念などを一般原則とする国連の障害者権利条約が制定され、また日本でも、この条約は、障害者差別解消法の成立、障害者基本法や障害者雇用促進法などが改正されて批准され、発効したのである。このように障害者問題に対しては制度的には改善が図られてきているが、しかし、社会には今なお差別や偏見といった意識のバリアが根深く存在している。

障害者雇用がなかなか進展しない原因は、この意識のバリアにある。これは、人間を一人の人格を持った人間として見ず、その人の属性（障害）だけを見て、「障害者は仕事などできない」という偏見から生じている。障害のある人は、人間としての尊厳を尊重されず、その属性ゆえに就労の機会を奪われ、社会から排除されているのである。それではどのようにすれば障害者雇用は可能であろうか。この問題について障害者雇用を積極的に行っている事例から考察しよう。

近年、企業の社会的責任との関係で雇用率達成のために、特例子会社（この子会社で雇用されている障害者数を親会社の雇用率として計算できる）を設立する企業が広がってきている。以下では、筆者がインタビューした特例子会社の事例を紹介して、障害者雇用のあり方を示そう。

障害者雇用に取り組んでいる企業に共通する特徴は、何よりも経営者が障害者雇用を行うという方針を明確に確立し、現場の抱える課題を解決していることである。障害のある人の雇用・就労では、障害の種類や程度に配慮する必要がある。障害の種類や程度は仕事の内容や種類に大きく影響を与えるからである。この点で、O社は、「障害があっ

ても、残された機能を活用し、足りないところは自動化技術でキメ細かく補完する」という考え方で、製造工程を見直し、障害に最適な配置を行い、治工具・補助機器の導入を進めて障害者雇用に取り組んでいる。例えば、両手の不自由な人と、片手だけが不自由な人では、組み立て作業や仕事のペースは異なるが、O社では、その人の仕事のペースに合わせて、機械の速度やベルトコンベアーの速度を変えている。また車椅子作業に最適な仕様で、仕事ができるように工夫されている。

I社は百貨店の特例子会社として設立されたが、独自の業務改革で障害者雇用を行っている。百貨店での一般の店員の仕事は、接客と客の購入した商品の包装やリボン作成、ギフトボックス作成など多種多様である。これらの仕事には客の要望に応じた変化への対応や長期的展望が必要な独創的なものと、単純反復的で正確性や持続性が必要なものの二つがある。本社が職務分析をしたところ、販売員が店頭にいる時間の半分はリボン作成などの仕事であった。その分、本来の顧客に接し商品販売する時間が少なくなり、売上げの制約になっていた。仕事の正確性や持続性といった作業は障害のある人が得意ではないかと考え、健常者の販売員は創造的な仕事を担当し、単純反復的な作業を障害のある人が担当するように仕事を分け、それぞれの得意分野を活かすように業務改革を行った。これにより販売員は接客の仕事に集中でき、売上げが増加した、とのことである。I社の社長は、障害に合う仕事を作り、それぞれの適性を活かした障害者雇用は会社貢献であり、社会貢献である、と述べている。

F社は、弁当容器（トレイ）の製造・販売をするメーカーで、障害のある人を多数雇用している。F社の基本的な考え方は、「障害者は働けることを前提に工夫し協力すれば必ず働ける」ということであり、そこでは障害のある人と健常者が協力して働いている。障害の特性に合わせた仕事の方法を工夫し、粘り強く教育訓練をして、障害のある人も健常者と同じように作業ができるようにしている。

以上の企業に共通する特徴は、仕事を障害に合うように編成して仕事をできるようにしていることであり、障害者雇用は企業の負担とはならず、むしろ



I社の業務スケジュール

企業に大きく貢献していることである。利益を追求する企業であっても、障害のある人に配慮し、職務や職場環境を変えることで、障害者雇用は可能である。それは、障害（人）に合わせて職務を考え創意工夫することで、新たな仕事の創造や職場を変革する機

会を与えるのである。「障害のある人に適した仕事がない、あるいは職場環境が十分に対応できない」といった理由で障害者雇用を避けている経営者は、欠けた能力（障害）を問題とし、今ある能力を活用しようとはしない。彼らは、障害者雇用のダイナミズムを認識せず、経営者としての新たな職場づくりやシステムづくりを放棄しているのである。

障害者雇用は、企業が障害のある人を一人の人格を持った人間として捉え、一人ひとりの人権を保障し、人間の尊厳や平等を尊重するかどうかを表している。この意味で障害者雇用の進展状況は、社会の人権文化の程度を表しているといえる。経営者が人権意識を持ち、障害のある人も社会を構成する一員と考え、その社会的責任を自覚して彼らや彼女らの適性や能力を活用すれば、障害雇用は大きく進展するのである。

日本は超高齢社会になり、労働力人口は急速に減少すると予想されている。このような状況では性別、年齢、障害のあるなしに関係なく、共に働き、共に助け支え合う仕組みを作ることが必要である。障害があっても働く意欲のある人が仕事をすることは、社会にとっても企業にとっても望ましいことである。障害のある人を単に福祉の対象として捉えるのではなく、社会や企業の発展に貢献する人的資源とするかどうかは障害者雇用の進展にかかっている。障害のある人もない人も共に働き、共に生き、共に助け支え合うバリアフリーの共生社会こそ、社会を彩り、豊かにするのである。

第7回橋セッション

「遠隔地域と大学との連携の在り方について」

地域包括協定を締結した和歌山県および那智勝浦町との連携について考える

ミニ講演

中世の熊野那智と京都—熊野詣と補陀落渡海を中心に

細川 涼一 Hosokawa, Ryoichi

本学学長

報告

和歌山県の過疎対策および大学のふるさと事業の成果

柏木 忠寛 Kashiwagi, Tadahiro

和歌山県過疎対策課移住推進班主査

那智勝浦町の現状・課題と今後の将来計画について

小谷 成郎 Kotani, Seiro

那智勝浦町役場総務課企画係副主査

熊野再発見プロジェクト 2016 参加学生の発表

木下ゼミ4 回生

朝岡 一将 Asaoka, Kazumasa

大門 佑輔 Daimon, Yusuke

中村 岳樹 Nakamura, Takaki

田中 成奈 Tanaka, Nana

田中 裕子 Tanaka, Yuko

司会 & コーディネーター

木下 達文 Kinoshita, Tatsufumi

本学地域連携センター長

本学は、昨年から和歌山県那智勝浦町との連携活動を開始し、本年6月には和歌山県および那智勝浦町と地域包括協定を締結した。そこで、地域との連携・交流企画「橋セッション」の第7回目は、「遠隔地域と大学との連携の在り方について」と題して、和歌山県と那智勝浦町の行政担当者を招き、9月14日（水）、本学アクティブコモンズ（クリスタルカフェ2F）にて開催した。

まず本学の細川涼一学長から、熊野那智に対する中世京都のまなごしについて講演を受けた後、和歌山県から県の過疎対策と大学との連携について、那智勝浦町役場から町の現状と課題と将来計画について、本学木下ゼミ4回生グループから「京都橋大学・熊野再発見プロジェクト」の活動について、それぞれ報告を受けた。これにより、過疎地の地域振興のために大学は何ができるのかを考える場となった。セッション終了後は、クリスタルカフェにて交流懇親会を行い、山科産の食材を使った料理を囲んで和やかに歓談した。

中世の熊野那智と京都—熊野詣と補陀落渡海を中心に—

細川涼一（本学学長）

「憧れの地」としての熊野那智

古代日本の座標軸では、南といえば四国、西といえば九州、日本の最南端といえば高知県の足摺岬や室戸岬という感覚があった。その意味で紀州は、本州唯一の南海道であり、古くから日本の南国と見られ、平城京や平安京の人びとにとって憧れの「暖かい南の国」であった。

その憧れの地—熊野三山を詣でることが盛んになるの



細川学長

は、平安時代からである。ちなみに熊野三山とは、本宮（田辺市本宮町）、新宮（新宮市）、那智（那智勝浦町）を指す。本宮は内陸部にあり、新宮と那智は熊野灘に面している。

江戸時代に書かれた『熊野年代記』（那智大社蔵）によると、秦の徐福が不老不死の薬を求めて来日して、紀州に至ったという伝説が成立し、新宮には徐福の墓と称せられるものもある。徐福伝説が熊野で成長したことから、「熊野＝不老不死のユートピア」とのイメージがあったことがうかがえる。

熊野詣が盛んになるのは院政期

熊野詣をした人びとは、京都から淀川を船で下り、途中で四天王寺（大阪市）なども見物しながら熊野に入っていた。そこから先は、大きく分けて大辺路と中辺路の2つのルートがある。

大辺路は、京都から和泉（大阪府）に出て、田辺から海岸に沿って那智・新宮に入る道であり、現在の紀勢本線とほぼ同じルートである。もう一方の中辺路は、田辺から山間に入って、本宮に入る道を指す。

天皇は、公務に縛られて自由に旅に出ることができないので、譲位して上皇（院）になると熊野に詣でようになった。それが熊野詣が盛んになる最初である。伝説的なものも含めると、宇多上皇や花山法皇等になるが、同時代の記録にはっきりとわかるかたちで何回も詣でているのは院政期の白河、鳥羽、後白河、後鳥羽といった人たちで、鳥羽院は21回、後白河院は34回、後鳥羽院は28回も詣でている。

後鳥羽院の熊野詣

歌人として有名な藤原定家は、後鳥羽院に随従して熊野を詣でたときの記録を『明月記』に残している。それを読むと、当時の熊野詣のようすがだいたいわかる。

まず建仁元年（1201年、鎌倉時代）10月5日に京都を出発して、12日に田辺に到着。翌13日に中辺路に入り、16日に本宮を参詣する。このようすが定家は、「感涙禁じ難し」と記している。18日には熊野川を船で下って、同日午後2時に新宮に着き、新宮で一泊後、19日に海岸沿いを徒歩で那智に向かう。

那智は、滝が有名で、中世末の戦国時代の頃の「那智参詣曼荼羅」には、すでに文覚が那智の滝で修行してい

るようすが描かれている。後鳥羽院も那智の滝を拝するが、定家はこの頃になると疲れてくるので、『明月記』に「嶮岨の遠路、暁より食せず、無力の極まり、術なし」と書いている。

那智の滝を拝した後は、日暮れ頃に那智社に参詣し、次に御経供養所に詣でている。この御経供養所とは、おそらく那智社に隣接し、西国三十三番観音札所の第一番札所である青岸渡寺と思われる。

翌日は雲取越え（本宮と那智を結ぶ山間の道）を通過して再び本宮に戻っているのだから、かなり強行軍だったことがわかる。

補陀落渡海ブームのはじまり

仏教では、観音浄土（補陀落浄土）があるのは南だと考えられた。那智は、京都から見れば「南のユートピア」だったことから、補陀落浄土は現在の那智勝浦町浜ノ宮の沖合にあるとされ、そこへ船で渡海することがブームになった。『熊野年代記』には、貞観10年（868）に慶竜上人が補陀落に渡海したとの記録がある。ただし、後世の江戸時代に書かれたものなので、伝説の域を出ない。同時代の記録で補陀落渡海の場所として那智が知られてくるのは、やはり平安時代になってからである。

たとえば覚宗（園城寺長吏で、熊野三山の檢校も兼ねていた）は、藤原頼長に対して「子どもの頃に補陀落渡海僧を見たことがある。この渡海僧は千手観音を乗せた船の舵を取らせ、船に乗って去った。それから七日間、風は止まなかったから、渡海の素願は達したであろうと人びとは噂した」というようなことを語っている。平安時代の半ば以降、浄土教の思想、つまり南無阿彌陀仏を唱えて阿彌陀の極楽浄土へ行こうという考え方が広まり、その進展とともに観音信仰の補陀落渡海も行われるようになったと考えられる。

さらに有名な事例として、寿永3年（1184）、平家の武将である平維盛が、頼朝らの源氏に押されるなかで悲観を感じて、屋島から脱出し、那智の浜ノ宮で入水自殺をした件がある。

また、『吾妻鏡』によると、天福元年（1233）には、下河辺行秀（法名：智定房）が熊野那智浦から補陀落山に渡海したとされている。「智定房が乗船した後、外から釘を打ちつけ、一つの扉もなく、日月の光を観ることもできず、ただ燈に頼るしかなかった」というような記

述は、棺桶に乗って旅に出たようにも読み取れて、遠回しの自殺行為とも受け取れるが、三十日ほどの食物と油がわずかに用意されたと書かれているので、なんとかして三十日を食いつなげば補陀落に到達すると考えたふしもある。

下河辺行秀は、かつて頼朝に仕えていた。頼朝が下野国（現栃木県）那須野で狩りを催した際、大鹿一頭が現れた。頼朝は弓の名手とされた行秀に鹿を射止めるよう厳命を下したが、行秀の矢は当たらず、代わりに小山朝政が射取った。面目を失った行秀は、狩り場で出家して逐電し、行方知らずになった。「近年は熊野山で日夜、法華経を誦読していると伝え聞いていたところ、結局、補陀落渡海の企てに及んだ」と、『吾妻鏡』には書かれている。

平維盛の例と考え合わせると、世俗の社会における敗者や名誉・面目を失った者が遁世して、もうひとつの道としての補陀落渡海をするという面もあったようである。かつては自殺行為的な見方をした人も多いが、「本当に補陀落浄土があると信じて渡海したのだ」と言う人もある。

「憧れの地・那智勝浦」だからこそ、補陀落渡海の間となった

このようにして那智勝浦は、補陀落渡海の間所としても有名になり、室町時代以降になると那智の浜ノ宮にある補陀落山寺の僧が補陀落渡海をするようになる。さらに、補陀落山寺の住職になった者は晩年には必ず補陀落渡海をしなければいけないという決まりができた。

しかし、これは実質的に自殺させられるのだということがわかってくるので、戦国時代には補陀落山寺の住職の金光坊が、住職でありながら補陀落渡海を拒否した。そのため、彼をみんなで那智の浦に沈めてしまったという「金光坊伝説」があり、現地には金光坊岩もある。以後、補陀落渡海は非人間的な行為だとされ、江戸時代以降は途絶えた。

インドでも、補陀落浄土は三角形をしているといわれている。昔の人の地理感覚では、釈迦の生まれたインドは三角形をしているので、おそらくインドの地形と重ね合わせて、そこに向けて船で旅立つという発想が生まれたのだろう。

いずれにせよ、那智勝浦町は、京都にとって「憧れの、暖かい南の国」であり、青岸渡寺が三十三番観音札所に

なったのも、補陀落渡海が行われたのも、おそらく「憧れの地」という意味があるだろう。そういうイメージで、人びとに長く語り継がれていったのである。この話が、本学の学生・教職員が那智勝浦町に親しみを感じる一助となれば幸いである。

和歌山県の過疎対策および大学のふるさと事業の成果について

柏木忠寛（和歌山県過疎対策課移住推進班主査）



柏木氏（和歌山県）

過疎地域の現状

和歌山県内の過疎地域は、面積の75.6%を占めるが、人口はわずか26.4%で、人口密度は県内平均の約3分の1である。広いところに人がパラパラと住んでいるイメージで、人口は漸減傾向にある。

一方、内閣府の「都市と農山漁村の共生・対流に関する世論調査」で2005年と2014年を比べると、都市住民の農山漁村への定住願望は増えており、特に20～30代の若い世代に多いのが注目される。

移住PR事業は、これまでは大阪が中心だったが、昨年頃から首都圏にウエイトを置くようになった。移住相談は驚くほど多く、私の部署だけでも毎日4～5件の問い合わせがある。

県の移住支援のしくみ

和歌山県は、市町村職員がワンストップで対応する移住相談窓口の設置と、地域住民や移住者で構成する移住受入協議会の設置を条件に、移住推進市町村を認定している。特に受入協議会は、移住希望者の見学に対応した

り、移住者の相談や支援を行うなど、定住促進に有効な組織となっている。

県が把握している限りでいえば、昨年度の県全体の移住実績は113世帯223人で、全国的な傾向と同じく、移住者が増えている。年齢層では30代が30%を占めて、最も多い。その理由の一端として、東日本大震災以降、自然の豊かなところで子育てをしたいという声をよく聞く。

移住前の住所地は、大阪府をはじめ近畿地区が67%と最も多いが、東京をはじめ関東地区も18%と、一定数がある。関東の割合をさらに増やすべく、首都圏での移住PR事業に力を入れているが、首都圏における移住地のイメージは長野県・千葉県・北海道などがメインとなっている。

移住相談会やセミナーを東京・大阪で開催し、さらに「住む」という視点で、実際に現地を体験してもらう現地体験会も実施している。現地体験会では、先輩移住者との交流、空き家見学、田舎暮らし体験等を行う。

和歌山県の「移住・定住大作戦」で、特に力を入れているのが若年移住者への支援で、40歳未満の移住者には奨励金（1世帯あたり最大250万円）を支給している。奨励金の額は全国的に見てもトップレベルだと自負しており、昨年度は22世帯の移住という成果をあげた。ただし、まだ爆発的な効果には至っていない。

「大学のふるさと」制度とは

都市部の大学と地域の連携をサポートし、継続的な交流を推進するのが「大学のふるさと」制度であり、いわば移住に至るまでの交流事業である。

その目的は、地域においては大学の知力や人的パワーを地域活性化に活かすこと、大学においては、学生の育成、研究・実践および社会貢献の場として使われることであり、大学と地域の双方にメリットがある事業だと考えている。

これまでに、羽衣国際大学と湯浅町、摂南大学とすさみ町、摂南大学と由良町、関西大学と田辺市、京都橋大学と那智勝浦町、大阪樟蔭女子大学とかつらぎ町で、「大学のふるさと」事業に取り組み、地域の伝統食材を使った健康レシピの開発、高齢者の見守り、伝統行事の復活、インターンシップの実施などに取り組んできた。

京都橋大学と那智勝浦町の連携は、「大学のふるさと」

事業の第5弾にあたり、学生の現地フィールドワークに基づく地域課題の提案、熊野再発見プロジェクトを中心とした観光PR、観光協会等と連携した単位認定型インターンシップの実施などに取り組んでいる。学生による観光資源掘り起こし活動には、学生48人と教員4人が参加した。今後どのように広げるかが課題である。

「大学のふるさと」事業の課題

県は、連携協定を結ぶために毎年、大学と市町村の意向調査を実施し、協定締結後は、活動の広報面での支援としてマスコミに資料提供等の対応をしている。

この事業の成果は多いが、活動費の捻出が負担になるケースもある。例えば、フィールドワークをするにも、バスを3～4日借りるだけで25～30万円かかるが、それを大学が負担するのは苦しい。県や市町村での予算化も容易ではなく、財源の確保は大学のふるさと事業を継続していくにあたり共通の課題となっている。

那智勝浦町の現状・課題と今後の将来計画

小谷成郎（那智勝浦町役場総務課企画係副主査）

豊かな地域資源を有する那智勝浦町

那智勝浦町といえば、マグロ、温泉、熊野古道が連想されるが、海岸部から山間部まで多くの地域資源をもとに成り立っている。なかでも観光と漁業は基幹産業で、町は「温泉とマグロのまち」をキャッチフレーズに宣伝している。また、那智の滝は、落差133メートルで日本一を誇っている。

那智勝浦町が属する東牟婁郡は、太地町、古座川町、串本町、北山村の4町1村からなり、和歌山県の南東部に位置している。那智勝浦町は、東側は熊野灘、北側は新宮市、南から西にかけては串本町と古座川町、南東側は太地町と接しており、海岸部から山間部まで183.31平方キロメートルの面積を有している。

和歌山県自体が半島なので、那智勝浦町から和歌山市までは3時間～3時間半、大阪市までは4時間～4時間半かかる。

那智勝浦町の基幹産業

那智勝浦町の人口は、全国的な傾向と同様に減少傾向にあり、町が独自に策定した人口ビジョンでは、2060

年に8,825人にまで減少すると予測している。

産業別就業者数は、観光産業の町という背景もあり、第3次産業が全就業者数の8割を占めている。第1次産業では水産業従事者の割合が多い。

観光客数は、10年ほど前は年間170万人余りだったが、平成27年度は130万人余りに減少している。紀伊半島大水害等の影響もあるかと思う。宿泊客は、観光客の半数余りを占めている。宿泊施設は6,000人余りの収容力を有するが、近年、宿泊客が減少するなかで施設の耐震化に対応できず閉鎖する施設も出ている。

漁業では、はえ縄漁法による生鮮マグロの水揚げは日本一を誇っているが、マグロ漁は近年、消費の拡大とともにアジア諸国の参入による資源の枯渇が懸念されており、苦境に立たされている。那智勝浦町は、勝浦漁協へのマグロの水揚げを確保すべく、勝浦漁協とタイアップして「紀州勝浦産まぐろ」のブランド化を図るとともに、外来船誘致の船主回りを積極的に展開している。

特色ある6つの地区

那智勝浦町を構成する6つの地区（旧那智町、旧勝浦町、旧色川村、旧宇久井村、旧下里町、旧太田村）は、それぞれ特色がある。

旧勝浦町は、JR紀伊勝浦駅、役場、勝浦漁協、温泉を有する宿泊施設等が立ち並び、町の中心部である。沿岸は、古くはサンマ漁が盛んで、私の子どもの頃はサンマ1尾が3～4円だった。私も毎日サンマを食べていた記憶があるし、いまでもサンマ寿司は名産のひとつとなっている。

旧那智町は、那智の滝、世界遺産登録を受けた熊野古

道、熊野三山のひとつの那智大社、西国三十三番の第一番札所の青岸渡寺などがある。平安時代の熊野詣を再現した「あげいん熊野詣」は今年で30回目を迎える。日本三大祭りのひとつ「那智の祭り」（現在の名称は「那智の扇祭り」）は、燃え盛る大松明を担ぐ勇壮な祭りで、毎年多くの見物客が訪れるが、近年、後継者不足が深刻化し、私を含む役場職員が応援参加している。

旧宇久井村は、吉野熊野国立公園の海岸地域の豊かな自然環境が広がっている。環境省が設置した宇久井ビジターセンターは、自然とふれあう施設で、その運営は地元住民を中心にボランティアで行われている。宇久井漁港は、定置網漁によりブリや伊勢エビ等の水揚げが盛んである。

旧下里町は、古くは太田川河口を拠点に、上流から炭などの産品を積み出していた関係で、商店を中心に栄えていた。海路運搬の衰退とともに、現在は住宅地となっている。文豪・佐藤春夫の生誕の地としても有名で、実家「懸泉堂」が現存している。

玉ノ浦海水浴場は、万葉集にも載っており、遠浅で、波も静かで、家族連れには最適の隠れスポットである。玉ノ浦海水浴場に注ぐ粉白川の支流で、ぶつぶつと水の湧く「ぶつぶつ川」は、長さ13.5メートルで、「日本一短い川」として認定されている。

また、旧下里町には、県の重要無形民俗重要文化財である「高芝の獅子舞」が伝承されている。那智勝浦町では、旧町村ごとに祭りの文化が継承され、これがコミュニティ活動組織のもとになっている面もある。

旧太田村は、米作りが盛んで、近年は総務省の過疎対策事業の補助金で「太田米」のブランド化を進めている。イチゴ栽培も盛んで、「くろしお苺」のブランド名で市場に流通している。

住民による地域活性化の取り組みも活発で、昨年度は廃校となった旧太田中学校の校舎を、地域住民が集まる拠点として整備し、地元物産の販売等をおこなっている。高齢化が40%以上と高いので、地元住民が元気に集まる場所を提供するために、この事業をスタートさせた。とても盛況で、いままで元気がなかった高齢者が気力を取り戻したという成果も聞いている。

旧色川村は、山間部の丘陵地に茶畑が広がり、ここで生産される茶葉は「色川茶」というブランドで知られている。町内で最も人口の少ない地域で、過疎化が進んで

いるが、30年以上も前からIターン者を受け入れてきた実績がある。移住推進策に対して地元の理解を得るのになかなか苦労したと聞いているが、その努力が実って、現在では人口の約3分の1がIターン者となっている。Iターン者の受入対応を担っているのは色川地域振興推進協議会で、相談者への援助や視察対応等を実施している。

町の将来計画—地域資源の活用と生活環境の整備

那智勝浦町は、海岸部から山間部まで幅広い行政区域を有しており、多くの地域資源も点在している。いまお話ししたように、こうした地域資源を活用すべく、町内の各地域で独自のアプローチをしているが、私としては今後もさらに活用を進めていくことが課題だと考えている。

同時に、住民サービスをもとにした支援策や子育てしやすい環境の整備も必要となっている。地域資源の活用と併せて、これらすべてがうまくかみ合えば那智勝浦町はとても大きく変化できるだろうと思う。

しかし、現状ではまだ統一された方向性が示せず、動きがバラバラになっている。京都橋大学との連携協定を契機に、これをまちづくりに活かすとともに、町職員に対しても町の将来を真剣に考えるような意識付けをしていきたい。

京都橋大学・熊野再発見プロジェクト2016 参加学生の報告

男子チーム

私たちは新宮市の熊野速玉神社、那智勝浦町のぶつぶつ川や玉ノ浦海水浴場等を回るなかで、観光客に無関心

な住民の姿に触れて、観光に対する地元住民の意識の低さを感じた。

この問題を解決するには、地元住民と役場と再発見プロジェクトのメンバーで交流会を開くのが有効だろう。それによって地元住民の意識が高まれば、観光ボランティアへの積極的な参加も得られて、より魅力的な観光事業を展開できるのではないかと。外に向かって那智勝浦町の魅力をアピールするばかりでなく、地元住民の意識を変えることの大切さを指摘したい。

女子チーム

私たちはまず那智勝浦町に隣接する太地町の「くじら博物館」を訪れた。この博物館は、観光スポットとして魅力的であり、ここを訪れる客を那智勝浦町に誘引できれば、きわめて魅力的な観光プランが立案できると思う。また、ブルービーチ那智は、駅の近くに立地し、設備も優れた海水浴場である。この魅力を地元住民以外に発信するには、写真を多用したSNSの活用が有効だと考える。このビーチに近い那智駅交流センター丹敷の湯という日帰りの入浴施設も、観光スポットとして利用できると感じた。

地元の小規模な養蜂場が生産する良質なはちみつなど、いわゆる「レアな産物」を集めて、土産物として提供できる場を設けることも提案したい。

改善すべき点として以下の6点を挙げて、報告を終わりたい。1. 運営人の意識変革、2. 情報発信と情報更新をこまめに行う、3. ランドマーク等の情報表示を適度に増やす、4. 住民の意識改善、5. 各施設の関わりをつくる、6. アドリブ力をつける。
(了)



小谷氏（那智勝浦町）



木下ゼミ男子チーム



木下ゼミ女子チーム

京都モダニズム建築を訪ねて 第19回*

*文化政策研究センター広報誌「News Letter」からの連載回数を引き継いでいる

智積院会館

河野 良平 Kohno, Ryohei

本学現代ビジネス学部准教授

今回紹介する建築は東山の美しい山並みを背景に、真言宗智山派の総本山で弘法大師の教えを脈々と現代に伝える智積院の境内の一画に佇んでいる。一般には「智積院会館」(1966)と呼ばれているこの建築は、増田友也(1914~1981)の設計によるものである。昨年(2015年)、生誕100周年が記念され、大規模な回顧展が京都工芸繊維大学において開催された。これまではやや距離を置いてみていたのだが、この展覧会でコルビュジェに影響を受けたと思われるシンプルだけでなく繊細さと大胆さを併せ持った増田の作品に興味を持った。この「智積院会館」において増田は西洋の古典建築を念頭におきつつ「日本建築の正統は、人間をも自然に帰属せしめて、その包括的な自然を重視する。それは極度に洗練された技法によるものとは言え、いわば原始的感情の表明であって、この意味で日本の建築は自然における人間の欲びのうたをうたうものである。この人間の欲びを表明することが智積院信徒会館の作者の主題であった」と記している。言い換えれば、建築を通して自然の恩恵をいかに享受するか、ということになるのではないだろうか。その辺りを踏まえてこの建築を見ていくことにする。

敷地は三十三間堂に程近い東山区東山七条、構造は鉄筋コンクリート(RC)造・ラーメン構造で、屋根のみRCシェル構造。規模は地上3階、一部中4階、建築面積1031m²、延べ床面積2700m²となっている。主な機能は宿坊で、1階にはロビー、食堂、浴室、脱衣室、事務室などがある。2階が宿泊室になっており、竣工時には10畳の和室が11室と会議室、ラウンジ、倉庫など

が配置されていた。1、2階は中央に中廊下のある左右対称の平面をしており、7500mmピッチで均等に割り付けられた柱の通り芯にあわせて各室が綺麗に並んでいる。3階には約160畳(約23m×13m)の大広間があり、食事や宴会を催すことができるのだが、この広々とした部屋には柱が1本もない。下階と同じラーメン構造であれば、室の中央付近に柱を設けねばならない。しかし、前述の通り屋根はシェル構造になっているため、南北両サイドに5本ずつと東西面の中央部に2本ずつの合計14本の柱を外周に沿って配置することで、柱と柱の間隔を最大で15m以上も離すことが可能となったのである。また、この部屋の天井は木製の格子天井になっていて、屋根から直接吊るされている(図1、写真1)。3次元曲面によって構成された無柱空間に木製の天井が吊られ、そこへ周囲から光が差し込んでくる様子かなりの迫力であった。その自然光は正方形の格子に取り付けられた半透明のプラスチック製のプレート透過し、下の大広間を明るく照らしている。さらにそのプレートは白、黄、青、オレンジなどの数色がランダムに配置されている。これは西面ファサードの壁面に開けられた複数の小さな開口部とも共通する手法で、コルビュジェが「ロンシャンの教会」で用いたデザインを連想させる。増田が光を内部に取り込むことに工夫を試みていることが読み取れる。

外部に目を移すと、東大路に面した入口から最初に入るのは北側の立面である(写真2)。コンクリート打放しの外壁は面が揃うように設計されているが、各階にバルコニーがあり、彫りの深い表情を見せている。さ

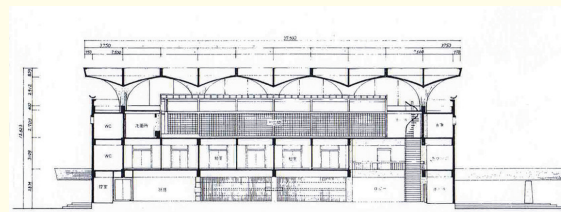


図1: 断面図。3階の大広間とその天井、シェル構造の屋根の関係がよく分かる。



写真1: 中4階天井裏空間。ヴォールト状の屋根は鉄筋コンクリート・シェル構造。周囲から自然光がふんだんに取り入れられている。(筆者撮影)

らに1・2階には1875mm間隔で、3階にはその倍の3750mm間隔で袖壁が設けられ、大屋根に至ってはさらに倍の7.5m間隔で屋根と一体化した柱を並べることにより、上階に行くにつれて開放的になるようデザインされている。特に屋根と一体化した柱は湾曲した形状が非常に効果的で、大きな屋根が四角い箱の上にフワッと置かれたように見える。屋根自体も下階の平面よりもやや大きく、屋根と中4階の間隔が下階のそれよりも広いため、屋根のフワッと感がより一層効果を増している。さらに、屋根の四隅が斜め上に向かって切り取られていることも、デザイン上の工夫として付け加えておきたい。南北面に比べると東西面の外壁には開口部が極端に少なく、表面のテクスチャーは砂利がハッキリ見える

ほどコンクリートを削った荒々しい研り仕上げになっている。南北面がスッキリとスマートな幾何学的デザインであるとすれば、東西面は自然の厳しさを表していると言えるだろう。

このように見てくると、増田は自然光を抽象的なものへ変換して内部へ採り入れ、上階へ行く程大きな(あたかも浮かび上がるような)空間を用意し、それらを囲む東西と南北の外壁を対照的なデザインでまとめていたこ



写真2: 北側外観。大きな屋根が建物から浮かび上がるように載っている。開口部も上に行く程、大きくなる。西側には大きな庇が付いている。(筆者撮影)

とが分かった。空に近い場所に柔らかな光に溢れた大きな空間を作ること自然を享受し、それを自然と人工という対照的な表現を纏った壁で囲む。増田は、訪れた人々が一時的に現世を離れ、光という自然に触れることで希望や救済を得ることができるよう空間を設計しようとしたのではないだろうか。

参考図書

『増田友也 生誕100周年記念建築作品集』2015年10月

¹ 増田友也「智積院会館」『近代建築』1967年3月号、p.130

障がいがあっても、なくても、安心して暮らせるまちに

障がいのある人が、まちなかで働き、暮らす意味

ゲスト

橋本 伸子 Hashimoto, Nobuko

一般社団法人ほっこり代表理事・ほっこりステーション施設長

聞き手

小辻 寿規 Kotsuji, Hisanori

本学現代ビジネス学部助教



橋本氏(左)、小辻助教(右)

合い言葉は「それぞれのペースで、のんびり、ゆっくり」

小辻 「ほっこり」は、障がいのある人に働く場を提供したり、その家族の相談を受けるなど、いろいろな機能を持った小規模多機能施設です。なぜ、このような施設をつくらうと思ったのですか。

橋本 私の子どもは障がいを持っていて、成人後は利用者が100人を超えるような大規模な通所施設に入っていました。でも、その職員さんとは、お互いに顔や名前をちゃんと知っていて、そのうえで率直に話し合う、というような関係は築けなかったんです。

そこで、もっと小規模にして、「顔の見える関係」というか、お互いのことをよくわかったうえで日々の活動をしていきたいということで、定員20名の小規模多機能施設をつくりました。

小辻 「ほっこり」という名前の由来は？

橋本 「それぞれのペースで、のんびり、ゆっくり歩いていこう」という思いを込めています。2年前に一般社団法人になりましたが、それまで任意団体として活動していたときは「歩っこり」と表記していたんです。そうすると読みにくいし、「ウォーキングの団体ですか」と聞かれることも多かったので(笑)、ひらがなの「ほっこり」にしました。

小辻 任意団体の時代から数えると、もう13年の歴史があります。

橋本 学校5日制が2005(平成17)年に始まるのを見越して、2003(平成15)年頃から、障がいのある子どもたちの余暇支援事業として、月1~2回集まって遊ぼうという企画を立ち上げたのが最初でした。

そのうち、だんだん「この子どもたちが成人したら、どんな支援が必要になるだろうか」と考えるようになって、現在のような就労支援事業や生活介護事業など、自立支援の活動に事業の重点を移してきたわけです。

「ほっこり」は社会参加の第一歩

小辻 「ほっこり」のホームページには「親亡き後の生活を見据え、自立の道を探ります」と書かれています。橋本 最初はそう考えていたのですが、いまは「ほっこりは、その人の人生の通過点になればいい。ここに通ううちに、本当に自分に合う施設や進むべき道が決まったら、どんどんそこに送り出そう」と思っています。

というのは、うちの利用者さんのなかには、学校を卒業してから施設につながっていない人が少なくないし、ずっと家に引きこもっていた人もいますね。だとしたら、ここでの生活は社会に出ていく最初の第一歩であって、ここで利用者さんの生活を完結させる必要はない。独り立ちする人は独り立ちすればいいし、人による援助が必要な人はより手厚く援助できる施設に移ればいいし、ここにずっといたい人はずっといてもらえばいい。どんなかたちであれ、一人ひとりに合うところを探していきたいので、利用者さんには「次はここに行きたい」と思うようになったら、いつでも相談してほしい」と話しています。

「ほっこの縁側」から「まちの縁側」へ

小辻 障がいのない人が、障がいのある人と出会う場面は非常に少ないです。バスや電車のなかで見かけて、バス停や駅で降りると、障がいのある人はどこかの施設に入っていくって、われわれの視界から消えていく…というかたちが多いのではないかと思います。ほっこりのように、働く姿が見えていたり、ひとりの人として接するという実践は、とても貴重だし、大切だと思います。

橋本 私は、障がいのある人たちのことを地域のみなさんに知っていただくことが、とても大切だと考えています。施設がどこにあるかわからないようでは、知っていただくことも難しいので、まちなかに立地することは最初から意識していました。

なぜそう思うかという、ここに来ている人たちは、どなたかに助けてもらわないと独りでは生きていけない人たちなんです。ですから、地域のみなさんに何かをしていただくという以前に、「ここで障がいのある人たちが働いているんやなあ」とか「家に帰ったらどんなことしてるのかな」「歳とったらどんなふうに住生活するのかな」

というふうに、まずは関心を持って、考えていただきたい。そうなるうえで、まちなかに施設があって、みなさんの目に触れることは、とても役に立つと思っています。そういう思いで新たにつくったのが「えんがわ工房」です。「えんがわ工房」は、染織の工房なのですが、それが外からも見えるようにしています。先に開設した「ほっこりステーション」は、あまり外から見えないつもりです。

小辻 外部からいろいろな人が来ると、利用者さんの負担になりませんか。

橋本 たしかに「ほっこりステーション」の場合は、外から人が来られると利用者さんは落ち着かなくなりました。そうやって利用者さんに負担をかけてまで施設を開放するのはちょっと違うなと思いましたし、作業場がもうひとつ必要だという事情もあったので、「えんがわ工房」は、外部の人が来られてもそれほど負担にならないような、障がいの程度の比較的軽い利用者さんで構成しています。

小辻 「えんがわ」という名前に込めた意味は？

橋本 「ほっこりステーション」の少し離れた縁側で、「ほっこりステーション」と一体のものだということもありますし、施設外のいろいろな人にとっても、ちょっと腰掛けられる縁側になれたらいいなあ…という思いがあります。

利用者が「教える人」になる“お仕事体験”

小辻 「ほっこり」が地域コミュニティに認知され、より身近な存在になるために、施設外ではどんな取り組みをしていますか。



ほっこりステーション「えんがわ工房」

橋本 舞鶴の赤れんがパークで「ほっこりフェスタ」を開催しました。地域のみなさんに来ていただきたいと言っている、施設で待っているだけでは来てくださる方が限定されますので、それなら私たちから出かけて行って、幅広い方々に障がいのある人たちのことを知ってもらおうということで、「お仕事体験 & 製品販売会」を企画したんです。染織作業の体験では、利用者さんも「教える人」になって、一緒にものづくりをしようと思っています。

小辻 利用者さんが「先生」として登場するという発想は、斬新で、すごく興味深いですね。

橋本 上手に教えたり話したりはできないかもしれませんが、できる限り挑戦してみようということで、思い切って企画しました。

それと、最近は健康志向でウォーキングをする人が多いし、うちの利用者さんにも歩くことが好きな方がけっこういるので、昨年からウォーキング大会を10キロと4キロの2コースで始めています。4キロコースは、車椅子に対応しようと思って設けたのですが、結果的には若いご家族がベビーカーを引いて、2～3歳の小さなお子さんを連れて参加して下さって、これには私たちも「そうか。4キロは車椅子だけでなくベビーカーにも対応できるコースやったんやね」と気づかされました(笑)。

地域の人びとから援助の手

小辻 施設の経営状況は？

橋本 うちの施設に限った話ではありませんが、開設時



ほっこりステーション「えんが工房」

に定員の9割の利用者がいるという前提で職員を配置しなければなりません。ところが、うちは開設から半年間、20名定員に対して利用者は3名だけでしたので大赤字でした。

運営資金は、法人の理事を務めている保護者と、施設外の方々からの寄付と、私が個人的に出す分でまかっています。いまはまだ赤字です。ほっこりステーションの改装費約700万円は、日本政策金融公庫から融資を受けました。

小辻 「ほっこり」の土地や施設は、自己所有ですか。

橋本 いいえ、支援して下さる方が無料で貸して下さっています。もともとスポーツ用品店とその方のお住まいでした。「お金がないのはわかっている。使っていないよ」と言ってくださって、たいへんありがたく思っています。

それと、なるべくお金を使わないために、現物を提供していただくようにしています。たとえば「着物の生地を使ってがま口の製品をつくるので、着られない着物があれば、ください」とか、「牛乳パックでこんな製品をつくるので、牛乳パックをください」と、ブログで発信すると、びっくりするぐらい集まるんです。ですから、私はしょっちゅう「ください情報」を発信しています(笑)。

学び+相談+ケアの場

小辻 これからも新しい事業に取り組みますか。

橋本 職員からは「大きな企画ばかり考えないで」とくぎを刺されることもあります(笑)、そうでもしないと私たちの思いの届かない人が必ずいます。そういう方々に発信することも私たちの仕事だと思っていますし、その機会をつくるために多少は大きなこともする必要があります。なので、今後も新しい事業を初めていきます。

ドコモの市民活動団体助成金をいただくことになったので、それを使って、障がいについて学べて、障がいへの理解を深められる本を100冊ぐらい購入する予定です。本は、毎日たくさん出版されますが、私たちから見ると要らないと思う情報もあれば、絶対に知っておいてほしいと思う情報もあるので、後者の情報をきちんと得られる本を購入して、みなさんに貸し出していきたいと考えています。

それと併せて、ここを気軽に相談できる場所にもして



橋本 伸子

京都府京丹後市出身、京都府立峰山高等学校卒業。

障がいのある子どもを育てる中で、本人や家族、関わる人誰もが笑顔でいられる場をつくりたいという思いで、平成27年「ほっこりステーション」を立ち上げる。

趣味は、人と会うこと。

いきたいと思っています。いままでは漠然と一般の方への働きかけを考えていましたが、この真向かいには幼稚園もありますし、心配や不安を抱えながら子育てをしているお父さんやお母さんもいらっしゃると思うんです。でも、支援センターや保健所に相談に行くには、ちょっと敷居が高いかもしれない。だから、ここは「ちょっと本があるみたいよ」とか「ちょっと相談に行ってみようかな」という感じで、気軽に相談に来ていただけるような場所にしたいと思うのです。

それと、障がいのある人の親というのは、毎日の生活が大変で、自分のからだのケアは後回しになりがちです。ので、「ちいさな交流会」というかたちで月1回、親御さんのからだのケアをする機会をつくり、そこにいろいろな立場の人が関わってもらえるような場をつくろうと考えています。そうすることで、「ほっこり」を通過点にして、お互いがどんどんつながってほしいと思うからです。

障がいのある子の親だからこそ、できること

小辻 利用者さんやその保護者の方からすると、30年後に良い制度ができて、そのサービスを必要としているいま、それを利用できなければ意味がない。その「いま」のために、橋本さんは動いている。橋本さんの原動力は何なのでしょう。

橋本 こう言うと語弊があるかもしれませんが、高齢者の方も含めて、とにかく利用者さんがかわいくて仕方がないんです。たとえば私がひとりで掃除をしていると、何も言わなくてもちゃんと雑巾を持ってきて、まだ掃除できていないところを拭いてくれたり、そういう日常のちょっとした行動が、すごくうれしいし、かわいい。そういう感情を味わうことができるのが、この仕事の喜びかなと思いますね。

それは、いままでできなかったことが、できるようになった喜びではなく、相手のためを思って行動してくれ

ることへのうれしさです。

それと、私自身、自分の子どもの障がいを受け入れることがしんどかったし、どうしたらいいのかわかる人もいなかった。親御さんのことは感情も含めてすべて受け入れたいと思っています。本音では「もう少ししっかりしてくださいよ」と言いたいときもありませんが、しっかりできないのも親だということ、私にはよくわかるんです。だから、そこを一番にサポートできる人間でありたいという思いは、けっこう動く力になっているかなと思います。

また、24時間ずっとわが子だけを見ながら育てている人って、いませんよね。たとえ自分の子どもであっても、やっぱり他人にゆだねるときもあって、いろいろな人に育ててもらえるのだから、「ほっこり」も地域のいろいろな方々に関わっていただいて、育てていきたい。そんな施設と地域の関係をつくるのが、私が障がいのある子の親になった意味ではないかなと思いますね。

難しさの中に新たな出会いと発見がある

小辻 舞鶴で「ほっこり」を展開することの意義はどこにあると思いますか。

橋本 このまちは、利用者が100人を超えるような大規模な施設はありますが、小規模の施設は長い間、ありませんでした。もし舞鶴に小規模施設がたくさんあったら、たぶん私はこの仕事をしていなかったと思います。

小辻 「ほっこり」を開設してよかったなと思うことは？

橋本 応援して下さる方がたくさんおられて、そういう方々と出会えたのがよかったなと思いますね。

それと、難しいこともたくさんありますが、「難しいなあ」で終わらずに次に進んでいくなかで、新たな発見がたくさんありました。これも「よかったなあ」と、しみじみ思っています。

(了)

忘れてはいけない当事者の視点

橋本さんと知り合って3年以上が経つ。知り合ったきっかけは私が理事長を務めるNPO法人つながるKYOTOプロジェクトが主催するコミュニティ・カフェ開設講座への参加だった。当時、彼女は一般社団法人ほっこりを設立するために奔走されている最中で、運営予定の施設で障がいのある者とそれ以外の住民が交流する場を考えることが参加動機だったと記憶している。

地方都市において障がいのある者の周辺環境はとにかく厳しい。作業所や支援施設は市街地の中心部から離れ、そこへアクセスする交通環境も乏しいことがよくある。都会以上に障がいのある者たちが多くの住民から見えない場所に追いやられているのだ。橋本さんはこのような状態に少しでも風穴を開けようと10数年間、舞鶴市で活動を続けられている。

特に彼女は障がいのある若者や子どものための社会運動を中心にされてこられたのだが、その凄さはいつでも笑顔を絶やさないとこにある。社会運動とは時には悲壮感も漂うものだが、彼女は外部にそれを感じさせない。自身の置かれた状況が好ましくなくてもそれを時には笑に変えながら乗り切られている。そんな彼女だからこそ、ほっこの活動で作業やイベントなどを行う時にもメンバーがついてくる。彼女に引っぱり回られてか、取材に訪れたえんがわ工房も笑顔が溢れていた。

私自身、障がいのある者達の居場所づくり運営に参画していたこともあるが、正直なところ現場はとても過酷な環境となることがしばしばあった。利用者の抱える障

がいの度合いも様々であれば、思いも様々だ。利用者以外にも運営者たちの思惑もあり、これが本当に利用者たちのためになっているのかと考えさせられることが何度もあった。利用者のために動いているのか、福祉の制度のために私達は動いているのか時には分からなくなる。運営においては、利用者にとって一番良い選択ではなくとも、どうしても今ある制度や補助金を利用すればなんとかやっていけるという誘惑に負けてしまいそうになることがあるのだが、橋本さんはそういう誘惑には負けず、常に障がいを持つ当事者とよく話し、意見を聞き、最終的には当事者の立場に立ち、常にベストな選択肢を考え、10年以上活動されてきた。その方法は、助成金に応募することや従来型の寄付の募集、クラウドファンディング等、様々である。その努力について、大変ですねという話をすると、彼女は笑いながらこう答える。

「制度とか、世の中の流れを待っていたら今やりたいことはできない。少々強引なやり方になっても、今いる当事者たちにとって、できる限りベストなことをしたい。」

先述したように、地方都市では障がいを持つ者の生活環境は厳しい。しかし、その環境でも笑顔を絶やさず、周りをほっこりさせ、優しい気持ちにさせてくれる橋本さんが舞鶴市にはいる。彼女に負けないように私自身も当事者の気持ちを常に考え、福祉活動に関わらなければと考えさせていただく機会となった。

(小辻寿規)

